

あがたぎの森



「おや、まあ、おばあさん。孫^{まき}さんの手
ひいて、どこへ行きなされたね。」

「ええ。この子に、できもんが出来て、
いたがるもんで、あがたぎさまへ、お
酒を持ってお参りしてきましたわ。」

「まあまあ、そうかね。遠いのによう行
きなされた。早うできもんを治してい
ただきますように……。」

いねをたばねていた手を休めると、き
くおばさんは、あがたぎの森に向かつて、
手を合わせました。

「あしたは、きつと、ようなるにちがい
ない。あがたぎさんは、ありがたい神
さんじゃからなあ。さあ、気をつけて
帰りなされや。」

夕日に赤くそまつた田んぼ道を、おば
あさんと孫は、にこにこしながら、帰っ
ていきます。

「あがたぎ」は、こんもりとした、小
さな森で、木や竹がみごとにおいしげっ
ていました。この森は、村の先祖^{せんぞ}様が
おりてきて住みつかれた所で、村人を守っ
てくれる森だと言われています。

そのうえ、この森には、できものを治
してくださる神様がいます。

長雨が続いて、川にかけてあった丸木
の橋が、大水で流れてしまったときのこ
とです。村の人たちは、新しい橋をかけ
るために、近くの山で木をさがしました
が、てきとうな木が見つかりません。

こんなときには、つい、あがたぎの森
の、あの、みごとな木が頭にうかびます。
「一本だけ、ただこうじゃないか。村
のために使うのだから。」



「そうだな。村の守り神様だもの。ゆるしてくださるにちがいない。」
「あがたぎさま、このりっぱな木を一本いただきます。」

「おかげで、いい橋がかけられます。ありがとうございます。」
お礼を言いながら、そつと、一本、切ってきたのでした。

ところが、次の日、森の木を切った人たちがみんな、いたいできものになやまされてしまったのです。

「こりゃあ、やっぱり、あがたぎさまの、おしかりじゃ。早う、おわびをして、できものを治していただく。」

と、酒どつくりをかかえて、あがたぎの森にかけつけました。

「あがたぎさま。大切な森の木を切って申しわけないことをしました。」

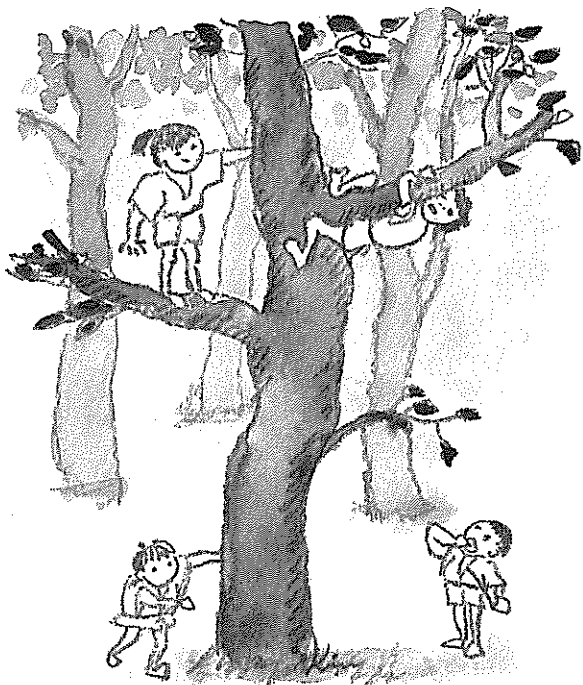
「どうか、このできものを治してください。お願いでございます。」

森の中を、ぐるりとひと回りしながら、何ばいも何ばいも、お酒をついで、森の神様にさし上げ、できものを治していただいたのでした。

今日も、秋晴れのよい天気です。村中がいねかりでだいそがします。

「おや、六兵衛さんが、大どつくりさげで、あがたぎさんの方へ行きなさるが、だれぞ、家の者にできもんが出来たのかのう。」

「いや、なんでも、きのう、六さんは、いねをほすさお竹が一本足りないもんで、こそつと、あがたぎさまの竹をもらってきたんじやと。そしたら、けさは、かゆいできもんがぼろぼろと出た



んじやそうな。それで、おわびに行くのじやろう。」
ばつが悪そうに、小走りにかけていく六兵衛さんの後ろすがたを見送りながら、信助さんと五作さんは、あがたぎの森に手を合わせ、また、仕事にせいを出します。

子どもたちは、あがたぎの森で、くりを拾い、木によじのぼって、元気に遊んでいます。